幼保小接続期カリキュラムの現状と課題についての調査研究

片平みちる
（愛知教育大学大学院　教育学研究科）

A Research about the Current situations and Issues of Curriculum in the Transition Period from Kindergartens Nursery schools to Elementary schools

Michiru KATAHIRA
(Graduate Student, Aichi University of Education)

Ⅰ　研究の目的

平成 20 年学習指導要領解説生活編(以下生活編)に「小１プロブレムなどの問題が生じる中、小学校低学年では、幼児教育の成果を踏まえ、体験を重視しつつ、小学校生活に適応すること、基本的な生活習慣等を育成すること、教科等の学習に円滑な接続を図ること、などが課題として指摘されている。」[1)]とある。また、「幼児教育から小学校への円滑な接続を図る観点から、入学当初をはじめとして、生活科が中心的な役割を担いつつ、…(中略)…低学年の児童が幼児と一緒に学習活動を行うことなどに配慮するとともに、教師の相互交流を通じて、指導内容や指導方法について理解を深めることも重要である。」[2)]と述べられている。つまり低学年期に、生活習慣や学習の面において、小１プロブレムの解決や、円滑な接続のために、幼児教育との接続が求められていることが分かる。

小１プロブレムとは、小学校入学期にみられる不適応状況のことであり、その態様[3)]として、「授業中に勝手に教室の中を立ち歩いたり、教室の外に出ていったりする」「担任の指示通りに行動しない」「教育的配慮や支援を要する児童に教員が個別対応している間に、他の児童が勝手なことをしている」「児童同士のけんかやトラブルが日常的に起きている」「私語が止まず、ざわざわしている」などが挙げられる。では、なぜ小１プロブレムが表れてしまうのだろうか。和田信行(2008)は「一つには、小学校に入学する前の段階に課題があると思われます。…(中略)…就学前の教育や保育には課題はないでしょうか。二つ目には、小学校１年生の指導計画や指導方法に問題があると思います。」[4)]と述べている。つまり、小１プロブレムの要因は、小学校側の問題だけではなく、幼児教育側にも課題があると考えられる。後藤正人(2014)は「幼稚園年長児と小学校低学年児童は、心身の発達状況に極めて類似性が認められる。心身の発達に即して教育を進める上から言えば、この連携が必須であり、子どもの発達が学校間の区切りで阻害されるようなことがあってはならない。しかし、現行の幼稚園等においては、幼児一人ひとりの自由な選択活動に沿って総合的な指導を行うのに対して、小学校においては、教科・領域に分け、…(中略)…一斉に指導するという異なりを見せ、この間に大きな段差がある。」[5)]と述べ、幼児期と低学年期は、発達特性が類似した時期でありながら、幼児教育と小学校教育のカリキュラムが根本的に違うことを指摘している。これらのことから、小１プロブレムは、幼児教育と小学校教育に大きな段差が生まれることで生じる問題であり、これは小学校教育のみの問題ではなく、幼児教育にも関わる問題であると言える。

では、このように大きな段差が生まれている幼児教育と小学校教育で、どのように接続を図ればよいのだろうか。横浜市(2012)は、「円滑な接続を図るためには、まず幼稚園・保育園・小学校の違いを知ることが大切です。」[6)]と述べ、幼児期の教育から小学校の教育に移行する一番開きの大きい時期として、年長の 10 月頃から小学校１年生の７月頃までを接続期としてとらえ[7)]、幼児期と小学校期における教育の目的・目標は一貫性・連続性をもって構成されている[8)]とした。そして、「広く、長い視野で子どもの育ちを見通したその中に『接続期』があるという認識に立ちながら接

続期のカリキュラムを考えることが重要です。」[9]と述べている。つまり、幼児教育と小学校教育違いを理解したうえで、それぞれを別のものと捉えるではなく、幼児教育と小学校教育の一貫性・連続性を意識した、接続期のカリキュラムを構成することで、幼児教育との接続を図ることが可能になるといえる。

横浜市(2012)は「接続期において、幼稚園・保育園で取り組むカリキュラムを『アプローチカリキュラム』、小学校入学から夏休み頃までに取り組むカリキュラムを『スタートカリキュラム』と呼んでいます。」[10]と述べている。また、一前春子・秋田喜代美(2012)は「幼児期を対象とした移行期支援カリキュラムであるアプローチカリキュラムや小学校期を対象とした移行期支援カリキュラムであるスタートカリキュラムは、子どもの特性や育ちを考慮しながら作成されるものである。」[11]と述べている。

秩父市(2013)[12]のスタートカリキュラムの実践では、朝には読み聞かせやゲームを行って心ほぐしをしたり、6年生が読み聞かせを行ったり、異学年との交流も行っている。また、生活科の学校探検を中心とした接続期カリキュラムを構成している。しかし、内容を見てみると、単元は学校探検でありながら、「くつばこ、ロッカー、トイレ、水道の使い方」や「整列」などを行っている。子どもたちが親しんでいる活動を取り入れながらも、学校探検で「学校に適応するための指導」を行っているため、適応指導的な側面が強くなっていると言える。このような接続期カリキュラムでは、本当に幼児教育を理解し、接続したカリキュラムと言えるのだろうか。白梅学園大学の無藤隆教授は、平成26年6月に開催された日本生活科・総合的学習教育学会第23回全国大会(埼玉大会)の基調講演で、生活科の課題の一つとして、「幼児教育の成果を受け、生活科は、それを小学校で学ぶ力へと転換する中核的教科である。しかし、ほとんどのスタートカリキュラムが適応指導に留まっており、その質に課題がある」と述べており、スタートカリキュラムの現状として、適応指導に終始していることを指摘している。

そこで、本研究では、①幼児教育と小学校教育の円滑な接続を図るための「接続期カリキュラム」を幼児教育、小学校教育のそれぞれの側から、実践事例をもとに分析を行う。②現状として、スタートカリキュラムが適応指導に終始していることから、スタートカリキュラムの中核となる生活科では、どのようにスタートカリキュラムを取り扱っているのか、教科書調査より明らかにし、望ましい接続期カリキュラムを考察する。

Ⅱ　今求められる接続期カリキュラム

1　幼児教育から見た接続期カリキュラム

小学校以降の教育とのつながりについて、平成20年幼稚園教育要領解説(以下、幼稚園教育要領解説)では、「幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること。」[13]とある。平成20年保育所保育指針解説書(以下、保育所保育指針解説書)では「保育所の保育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに留意し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること。」[14]とあり、幼稚園教育要領解説と、ほぼ同様のことが述べられている。また、幼保連携型認定こども園教育・保育要領(以下、認定こども園要領)では「幼保連携型認定こども園においては、その教育及び保育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、乳幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること。」[15]と述べられている。以上の3点を比べると、どの内容も同様のことが述べられており、幼稚園、保育所、認定こども園での、小学校以降とのつながりの捉えは同様のものであると言える。つまり、つながりを「接続」と捉えるのであれば、幼児期における「接続」は、幼児期の教育や保育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、乳幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度の基礎を養うことであると言える。

接続の具体的な例として、幼稚園教育要領解説

では「幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため、幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど、連携を図るようにすること。」[16]とある。保育所保育指針解説書では、「子どもの生活や発達の連続性を踏まえ、保育の内容の工夫を図るとともに、保育所の子どもと小学校の児童との交流、職員同士の交流、情報共有や相互理解など小学校との積極的な連携を図るように配慮すること。」[17]とある。認定こども園要領では「園児の発達や学びの連続性を確保する観点から、小学校教育への円滑な接続に向けた教育及び保育の内容の工夫を図るとともに、幼保連携型認定こども園の園児と小学校の児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど、連携を通じた質の向上を図ること。」[18]とある。これらのことについて、無藤隆(2014)は「従来、子どもの交流や保育者・教師の共同というあたりの連携に止まっていたものが、それに加えて、カリキュラムの接続を重視することに進んでいます。そして、小学校を見通した教育・保育の内容の工夫を求めています。それは小学校に向けてであると同時に、教育・保育の質を向上させていくためでもあります。」[19]と述べている。つまり、幼児教育から小学校教育へ接続を図るためには、教員間の連携だけでなく、小学校の教育を見通して、カリキュラムから接続することを視野に入れ、保育内容の工夫を図ることも重要であることが分かる。

横浜市(2012)の保育園のアプローチカリキュラムの実践として、「ザリガニ釣りからはじまった自然への興味・関心の広がり」[20]がある。実践の内容を以下に要約した。

○活動のきっかけ

担任は、年長に進級した４月に子どもたちの興味があることや、好きなことを知るために、子ども一人ひとりをじっくりと見ていた。その結果、子どもたちは、春の自然や虫探し、桜の花びらを取り入れた遊びをしていることが分かった。そこで、自然の中で遊びこみ、心に響く体験をし、自ら感じることで、「知りたい」「遊びたい」などの気持ちを膨らませることができるのではないかと考え、ザリガニ釣りの活動を設定した。保育者が遊びを通して、釣竿を作り、本物のえさを準備する様子を見ることで、本当に捕まえられるのかという期待を膨らませていった。

○ねらい

◆体験を通して、感じたことや気付いたことを様々な形で表現することを楽しむ。

◆生き物に継続的に触れる中で「知りたい」という気持ちを膨らませ、様々なことに気付いたり、自ら調べたりする。

○活動内容

準備や提案は保育者が行うが、子どもたちが、その過程を見る中で、「行きたい」と発言するまでは、ザリガニを釣りに行く計画を実行しなかった。子どもたちから「行きたい」と伝えてきたときにはじめて、ザリガニを釣りに公園に出かけた。ザリガニを釣りに行くのは１回ではなく、つれなかった経験や、今度は自分の釣竿を作っていきたいという思いなどから、次の活動意欲につなげた。

子どもたちは、自分たちで釣竿を作ったり、牛乳パックでザリガニを作ったりして、ザリガニ釣りの練習をするようになった。その際、保育者は、子どもたちの「自分で作りたい」という思いや願いを大切にし、いつでも作れるような環境を設定した。

そして、ザリガニ釣りの２回目に出かける。今度は自分たちで作った釣竿を持って出かけた。ザリガニが釣れると、そのザリガニを飼ってみたいという思いが生まれた。ザリガニを飼うにあたり、保育者は、水槽の環境づくりを子どもたちに任せた。最初から自分たちで取り組むことで、自分たちの手で行えたという自信につなげるためである。

ザリガニと継続的にかかわる中で、子どもたちは、絵本や図鑑を使い、飼育の仕方を調べていった。互いに調べたことや、分かったことを伝え合うことで、飼育活動への興味関心をさらに高めるようにした。ある日子どもたちはザリガニの脱皮を発見する。ザリガニの脱皮に興味を持った子どもたちは、「脱皮をやってみたい」といった。ザリガニの脱皮をカラービニールなどで表現することで、ザリガニの歌やお話づくり、絵を描くなど

の表現活動へと発展していった。

この活動は、子どもたちが興味を持っている遊びから発展した活動であると言える。保育者が子どもの興味関心に寄り添うことで、自然を使った保育に決定し、子どもたちの期待感を膨らませながら、子どもの発言を取り上げて行っている。また、ザリガニを釣ることで、ザリガニへの興味が高まり、飼育の活動へと発展した。継続して飼育をすることで「脱皮」に出会い、自分たちも脱皮をしてみるという子どもらしい表現の活動へと変わっていった。この実践を通しての支援のポイントや、結果を以下に要約した。

ポイントの１つ目は、子どものありのままの姿を、良く見て、感じていくことで、興味関心を見つけていくことである。活動の内容でもあるように、保育者は、子ども一人ひとりの姿を見取り、自然を使った遊びをしている子どもが多いことから、この活動を設定した。保育者が子どもの心と向き合うことで、共に生き生きとした活動を作り上げることができるようになる。「やりたい」「遊びたい」という子どもの活動意欲を大きく育んでいくためには、活動のスタートが重要であると言える。また、「育ちをつなぐ」という観点から、４歳児の時の育ちを保育者同士で共有し、良いところは伸ばし、課題には時間をかけて取り組むことができるようにした。

ポイントの２つ目は、体験する楽しさから、興味関心を膨らませ、意欲を大切にすることである。子どもたち自身が体験することで、次の活動の意欲につながると考えた。年長になったばかりの頃は、自分たちの力だけで活動することが、難しい場合もある。その時は、保育者も一緒に遊びに参加し、子どもたちと同じ目線に立って活動を積み重ねた。

１回目の活動を通して、自分たちで釣竿を作りたい、えさを変えたり、練習をしたりすればいい、などの思いが芽生え次の活動意欲になった。たっぷりと遊びこむ時間を作ることで、子どもたちは遊びにのめり込んでいった。自分たちの釣竿でザリガニが釣れた時には、友達が釣れた時でも、自分のことのように喜び合う姿が見られた。

ポイントの３つ目は、子どもたちの中の疑問を学びの芽に繋げることである。子どもたちの中に生まれた「知りたい」という気持ちは、遊びの中で「調べよう」という姿につながる。沢山のことを発見し、友達と伝え合い、飼育活動を通して学び合う姿が生まれた。保育者は子どもが調べたり、継続的に観察したりできる環境を構成することが重要である。保育者は、すべてのことを教えるのではなく、待つことも重要で、「知りたいとい」という思いの力を改めて感じた。継続的に飼育活動をして、深めることで、子どもたちなりの視点を見つけ、ザリガニを身体表現で伝え合ったり、歌を作ったり、ダンスをしたりなど、自由に表現する姿が自然に生まれた。

ポイントの４つ目は、実体験による気付き、驚き、喜びは子どもたちの心に響く活動であり、その場面、その瞬間を大切にし、子どもたちなりの捉え方に共感することである。子どもたちは、「ザリガニは脱皮する」ということを調べて知っていた。ある日、本物の脱皮に出会った。その時は昼食の時間だったが、その瞬間を大事にしたいと思いしばらく観察を続けた。「脱皮をする時にうまくいかずに死んでしまうこともある」ということを知っていた子どもが発言すると、他の子どもたちは、「うまくいって良かったね」と声をかけ、「脱皮って難しいの？」と疑問が生まれた。このことから、ザリガニの衣装を作り、脱皮をしてみる活動が展開された。実際に脱いだり来たりしているうちに、ザリガニの手の形では脱ぎにくいことや、きつい服を脱ぐのは難しいことなどが分かってきた。疑問や関心に取り組み、自分たちが、実際に体験することで、自分たちのものにしていく姿が見られた。

この活動を通して、子どもたちは、体験する楽しさから、興味関心の幅を広げて、学びの芽を育てていったと言える。飼育活動を継続的に行う事で、調べることや、友達と伝え合うことなど活動に広がりが見られた。佐伯胖(2003)は「子どもが何かを知るということを見るまなざしの時に、その子どもを見るというよりは、子どもが見ようとしている世界を共に見ることで、共感的に知を味わうことが大事だと考えています。…(中略)…子

どもが味わっている世界を一緒に味わう、本当だな、とか、いいことだなとか、あるいは不思議だなとか、その子どもが見ようとする世界を共に見ながら知を味わうわけです。」[21]と述べている。つまり、この活動のように、子どもに教師が寄り添い共感しながら活動を行う事で、学びを得る瞬間を見取ることができたため、ザリガニを釣るという活動から、ザリガニを表現する活動まで発展したと言える。

ザリガニの飼育活動を通して、子どもたちは、調べることや分かったことを、友達と交流して伝え合うことなどを学んでいる。また、学んだことの表現方法を様々な表現活動を通して身に付けていると言える。横浜市(2012)の別の実践事例である「もうすぐ一年生」[22]は、園児の就学への不安感が膨らむ中、小学校と交流活動を行い、一緒に遊ぶ活動である。この活動で大事にされているのは、ザリガニの実践事例と同様に、子どもの目線に立つことや、体験をすることである。学校探検をする際に、子どもの目線に立ち、園にはない教科の教室や施設への気付きに共感する。共感することで、期待感をもたせ、小学校が楽しいと感じる思いを大切にし、安心して入学できるようにする。また異年齢の児童と一緒に歌を歌ったり、遊んだりしてかかわることで、他学年の児童の存在を身近に感じ、小学校への緊張がほぐれ、楽しさが増す。

これらのことから「アプローチカリキュラム」では、子どもの興味関心に寄り添った保育者の支援が必要であり、子どもの学びに共感することで、その学びの芽を伸ばすことができ、活動が発展することで、子どもたち同士の交流や、学びあい、様々表現活動などが表れ、小学校以降の学びにつながると言える。横浜市(2012)は「『アプローチ』というのは、『小学校のための準備』、あるいは、『小学校に対する適応指導』という意味で使っているのではありません。その時期の子どもの発達に合わせ、十分に子どもの育ちを引き出していくことが、自然に小学校教育につながる力を育てていく、という意味での『アプローチ』です。」[23]と述べている。つまり、幼稚園でのアプローチカリキュラムは、小学校の教育に適応させるための前段階ではなく、あくまでも、幼児期の子どもの発達に即した、保育を行いその中で、学びの芽を育てていくことが重要であると言える。

2　小学校教育から見た接続期カリキュラム

小学校の接続期カリキュラムである「スタートカリキュラム」とは、「小学校へ入学した子供が、幼稚園・保育所・認定こども園などの遊びや生活を通した学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を作り出していくためのカリキュラム」[24]である。生活編には「大単元から徐々に各教科に分化していくスタートカリキュラムの編成なども効果的である。このように総合的に学ぶ幼児教育の成果を小学校教育に生かすことが、小１プロブレムなどの問題を解決し、学校生活への適応を進めることになるものと期待されている。…(中略)…児童に『明日も学校に来たい』という意欲をかき立て、幼児教育から小学校教育への円滑な接続をもたらしてくれる」[25]とある。つまり、スタートカリキュラムの目的は、幼児教育での学びを小学校教育へと円滑に接続し、新入学の児童が学校生活をおくる中で、主体的に自己を発揮しその過程で、学校生活への適応を図るものであると言える。和田(2014)は「スタートカリキュラムでは、この教科のスタート学習でも、子供の実態に合わせた楽しい活動を工夫することが求められる。なぜならば、小学校入学前の経験が一人一人大きく異なるからである。」[26]また「スタートカリキュラムは子供の実態に応じて適宜カリキュラムを改善していく必要がある。」[27]と述べ、子どもの実態を把握し、それに即した活動の工夫と、柔軟に計画を立てることの重要性を述べている。以上のことから、スタートカリキュラムは幼児期から小学校期の学びをつなぐことや、学校への適応が目的とされている。しかし「適応指導」を行うのではなく、子どもの実態に即した活動計画をして、子どもが主体的に自己を発揮し、その活動を行う中で自然と適応が図られるよう構成するものであると言える。

スタートカリキュラムの実践事例として仙台市(2010)の実践[28]がある。実践の内容を以下に要約した。

○基本方針

入学前に生活環境・経験が異なる児童を、小学校生活に適応させていくためには、具体的な活動や体験を通して必要な技能や習慣を身にうけさせることが大切である。そこで、「単元構成の工夫」「学年合同わくわくタイムの設定」「指導内容」の３つの柱で、カリキュラムの作成に当たった。スタートカリキュラムの期間は前年度の実態をもとに、入学当初から５月連休明けの５週間とした。

「単元構成の工夫」では、直接体験を重視した生活科を中心に週ごとに気付きの質が高まるように構成した。「学年合同のわくわくタイムの設定」では幼稚園や保育園で慣れ親しんだ歌や遊びの活動を取り入れ「わくわくタイム」を設定した。毎日１校時目に多目的ホールに集合し、学年合同で活動した。１モジュール＝15 分と設定した。「指導内容」は、保護者アンケート調査をもとに、身に付いていない力を伸ばす指導内容にした。

○週のプランと実践

１週目～２週目：週のねらいとして、学校にはどんな「もの」や「場所」があるのか気付くことができるようにした。気付きの質が高まるように、毎日２時間目を生活科の時間に設定し、教師を先頭に学校探検を行った。探険した場所や分かったことを掲示物にしたことで、子どもたちは次時の活動に意欲をもつことができた。毎朝、学年合同で歌や遊びを行うことで、１日を笑顔でスタートすることができた。学級の枠を超えて活動することで、沢山の人とかかわり、他の学級の児童とも仲良くなりたいという願いをもつようになった。

３週目：週のねらいは、学校にどんな「もの」があるかを気付くことができるようにする、見つけたものについて発表したり、絵や文で表現したりできるようにする、と設定した。「わくわくタイム」と２校時目以降の学習で「話を聞く」「仲良く活動する」ことなどが無理なくできるようになった。「もっと勉強がしたい」という声が聞かれるようになったので、「わくわくタイム」の活動は教科のつながりを意識したものにした。

４週目：週のねらいは、学校で働く人が、このような思いや願いをもってどんな仕事をしているのか気付くことができるようにする、と設定した。学校探検での、人とのかかわりから出会わせたい人を「校長先生」「給食の先生」「技師さん」とし、仕事の内容は違っても、自分たちを支えていることが分かるように、実際に仕事を見ることができるようにした。自分の考えを伝え合う活動を多く取り入れることで、発表の仕方や楽しさを感じ、伝え合いの活動を楽しむようになった。「わくわくタイム」で身に付いたことを掲示し、できるようになったことを実感し、自信を深めることができた。

５週目：週のねらいは、学校で働いている人との思いや願いを受けて、自分ができることを考える、とした。これまで学習してきたことを生かして、子どもたちの生活が広がるようなまとめをした。これまでの学習で自分たちを支えてくれる人の存在を知り、それらの人達に「笑顔であいさつをしよう」などと考えることができた。

この活動では、子どもたちが入学前に親しんできた活動を取り入れて、１日をスタートさせることで、安心感をもたせるためのカリキュラムであると言える。学習活動は、学校探検を中心に構成され、探検を通して学校の施設や、働く人などに関心を広げている。この活動の成果として、三塚幸恵(2010)は、「『学校探検』の活動にじっくり浸ることができた。…(中略)…子どものつぶやきを基に『学校探検』の単元の学習を進めた。子どもの思いを大切にしたことで、主体的に生活科の学習に取り組んでいこうとする意欲が高まった。」[29]と述べている。また、「学びの必然性が生まれるような活動を設定することで、無理なく身に付けさせたい力が身に付いた。」[30]と述べている。三塚(2010)は課題として、「カリキュラムの内容をその都度、子どもの実態や伸びに合わせて更新していく必要がある。…(中略)…カリキュラムの内容を実践していくことが大切なのではなく、子どもに身に付けさせたい力をつけることが大切なので、…(中略)…どんな力を付けさせていきたいのか教師が明確にしておく必要がある。」[31]と述べている。

以上より、この実践では学校探検から生活の幅を広げることができたと言える。また、学年合同の活動を毎日取り入れることで、友達の輪も広が

り入学したての子どもたちにとっては、仲間づくりを行う場面を設定できたと言える。しかし、1～2週目の学校探検では「お便りのしまい方」や「出席番号順に並ぶ」「体育着に着替え」などの活動が見られる。このような活動を取り出して行ってしまっては、生活科としての学校探検ではなく、適応指導となってしまうのではないだろうか。また、まっすぐ並ぶことを指導するために、ゲームを取り入れ、まっすぐに並ぶことを指導するとある。これは、ゲームを通して学んでいるともとれるが、ゲームの時にまっすぐ並ぶことができても、実生活に即してなければ、本当に必要な時には行えないのではないだろうか。川崎市(2015)[32]の実践においても、平成26年度のスタートカリキュラムの例として、第1週目に、生活科の「がっこうだいすき」の中で「靴箱、傘立て、トイレ、水道の使い方」が設定されている。また、「帰りの支度」も生活科の中で行うなど、適応指導的な側面が強い内容となっている。

先にも述べたようにスタートカリキュラムは、「学校への適応を図る」ものである。無藤(2007)は「幼児教育での成果を小学校に引き継ぎ、子どもが幼稚園で得たものを小学校の授業で発揮できるようにするための特別な時期とそこでの活動を組んでみてはどうだろうか。それが接続期という仕組みである。」[33]と述べている。つまり、スタートカリキュラムは、「幼児期からの学びの芽をつなぐ」という重要な役割も持っており、スタートカリキュラムを構成する上で、忘れてはいけない要素であると言える。

Ⅲ　教科書調査

1　調査概要

(1)調査目的

生活科を中核としたスタートカリキュラムを行うにあたり、生活科の教科書では、スタートカリキュラムをどのように取り扱っているのか、調査を行う。

(2)調査対象

平成27年度版生活科教科書及び平成23年度版生活科教科書のA社～G社の計7社を調査対象とする。対象とする教科書は、日本文教出版、啓林館、学校図書、東京書籍、大日本図書、光村図書、教育出版の7社のものである。

平成27年度版生活科教科書の7社すべてで入学直後の学校の生活や、学校探検を掲載した後に、飼育栽培活動の掲載が行われている。したがって、この調査におけるスタートカリキュラムの実態調査の範囲は、飼育栽培活動に入るまでの単元とする。

2　結果と考察

教科書を比較した結果を以下の表にまとめた。

表1　平成27年度版教科書と平成23年度版教科書の比較

	平成27年	平成23年
A社	・「いちねんせいになったら」のページでスタートカリキュラムのためのページと明言している。 ・生活の様子を掲載したページでは、「ぬれたてはどうするの」「らんどせるはどこにかたづけるのかな」など、掲載している。 ・授業の風景では、「はなしをしているひとをみてるんだね」「てはまっすぐあげるんだね」など、授業中のルールについて述べられている。	・片付けなどに関する掲載はない。 ・最初のページで、幼稚園での様子が「たのしかったね」と掲載されている。 ・友達と遊ぶ様子や遊びの種類などが掲載されている。
B社	・学校での1日の様子の中に、チェックリストを設けている。「あいさつ」「へんじ」「じゅんび」の項目にチェックを付けるようになっている。 ・挿絵により、整理整頓の様子などが描かれている。	・チェックリストは、学校で行うものではなく、前の晩の準備から、学校に行くまでの様子がチェックリストになっている。 ・「ともだちをいっぱいつくろう」では、名刺の書き方や、自分を紹介することなどが紹介されている。
C社	・学校に来てから	・片付けや、準備など

	は上靴に履き替えることや、ランドセルを決まった場所にしまうことを掲載している。 ・授業の準備などについて「うわばきにはきかえるよ」「にもつはきまったばしょにいれるよ」などと掲載している。	に関する特別な記載はなく、写真のみ掲載されている。
D社	・「すたあとぶっく」としてページを構成している。 ・「すたあとぶっく」の内容は、保護者向けの内容からはじまり、学校生活について、整理整頓の仕方、挨拶、トイレなどについて掲載されている。	・学校の様子は写真で掲載されているのみである。
E社	・整理整頓などに関する掲載は写真のみである。 ・「ともだちたくさんつくろう」では、雨の日の遊び方に関する掲載や、じゃんけんや手遊びなどの遊びの種類を掲載している。	・整理整頓に関する掲載はない。
F社	・学校生活に関する靴箱や、整理整頓、トイレに関する掲載はない。	・整理整頓などの生活に関する写真や挿絵などは、下駄箱の写真があるのみである。
G社	・「できるかな」という欄に傘立てや、水道、トイレの写真を掲載している。写真は、教師を中心に子どもたちが使い方の指導を受けているものである。	・傘立て、水道、トイレの写真を掲載しているが、「できるかな」と項目を分けて掲載していない。

分析結果より、A社とD社はスタートカリキュラムと明言したページを平成 27 年度版教科書に新たに増やした。これは、スタートカリキュラムが重視されているためであると考えられる。しかし、内容を見てみると、整理整頓や、トイレの利用などについての内容であり、適応指導的な側面が強いものであると言える。B社、C社、G社は、スタートカリキュラムであると明言こそしていないものの、平成 23 年度版教科書では掲載されていなかった、物のしまい方の吹き出しや、チェックリストを設けるなど、学校生活に適応するための掲載が増えたと言える。

一方、E社とF社は、平成 23 年度版と同様に、整理整頓に関する掲載は増えておらず、遊びや、友達とのかかわりなどが中心に掲載されていた。これは、入学期を意識していないということではなく、入学初期だからこそ、友達とのかかわりや、遊びなどを大切にしているということの表れではないだろうか。

3　まとめ

各社の平成 27 年度版生活科教科書と平成 23 年度版生活科教科書を比較した結果、多くは、学校生活への適応に関した内容が増えていることが分かった。平成 23 年度版では、遊びや友達とのかかわりを中心に掲載していた教科書でも、学校の様子を多く掲載する傾向にあった。つまり、各社スタートカリキュラムを意識した内容構成をしていると言える。

スタートカリキュラムが各社で意識されているということは、それだけ入学当初が重視されているということである。しかしながら、生活科で扱われているにもかかわらず、生活習慣を身に付けさせる活動を切り出して掲載しているため、スタートカリキュラムではなく「適応指導」になってしまっていると言える。

また、幼児期の学びを繋ぐといった面では、そのような様子はほとんど掲載されておらず、遊びに関して、「あそんだことあるね」などの掲載に留まっている。平成 23 年度版A社では、幼児期の様子を想起した後に、小学校の生活の様子へ入る構成になっていたが、平成 27 年度版でそのような構成は見られなかった。

Ⅳ　まとめと今後の課題

これまで、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの実践事例をもとに、それぞれの側から見た接続期カリキュラムを分析してきた。幼児期と小学校期の接続期カリキュラムの目的は違うものであるが、学びの一貫性・連続性は総じて重要なものであり、それぞれの接続期カリキュラムを構成する上で、外してはいけない概念だと言える。では、どのような接続期カリキュラムが望ましいのだろうか。無藤(2007)は「具体的にどのように低学年の教科教育で幼児教育の成果を受け止め生かしていくのかの検討が今後に必要である。」[34]と述べている。つまり、幼児教育で親しんだ手遊びや歌だけを取り入れるのではなく、幼児期に得た学びを接続することこそが必要であると言える。幼児教育には、小学校教育を意識した、学びの芽を育てることが重要である。小学校では、幼児期に行った「遊び」から得た、興味・関心があることを追究することや、その活動に十分に浸ること、友達とのかかわり方など、幼児期に得る様々な学びの芽を摘むことなく、伸ばすことが重要である。

幼児教育では、日々の遊びが丸ごと学びに繋がっている。そのため、日常生活や保育活動の中でアプローチカリキュラムを進めることができる。実践事例から分かるように、保育者は子どもの興味・関心に即した支援を行い子どもの学びに共感して、学びの芽を伸ばしている。これは生活科でも言えることであり、生活科の目標である「具体的な活動や体験を通して…(中略)…自立への基礎を養う」[35]ということを考えれば、本稿で取り上げたスタートカリキュラムの実践事例のように、適応指導的で教師主導になってはいけない。だからこそ、小学校では幼児期の発達特性をふまえ、活動中心、遊び中心の教科である生活科が、スタートカリキュラムの中心的な役割を果たすと言える。後藤(2014)は「生活科では、このような課題遊びだけでなく、自由な遊びも学習として認可したのである。…(中略)…幼稚園の子どもは遊びながら、体を動かし、自らの興味従って行動を行い、追求している。子どもの心身の発達を考えるとき、幼保小の連携は不可欠である。」[36]と生活科を中心とした幼保小の連携の重要性について述べている。

これらのことから、接続期カリキュラムは、幼児期の遊びから得た学びを小学校で適切に接続し、学びの一貫性・連続性を念頭に置いたカリキュラムを構成する必要がある。また、スタートカリキュラムは、幼児期で得た学びはどのようなものであるかを理解し、学校への適応指導を行うのではなく、活動をしていくうえで、幼児期に得た力を子どもが主体的に発揮しながら、自信をもち「活動を通して」学校に慣れていくようなカリキュラムを構成することが必要であると言える。

生活科の教科書でも、学校への適応に関する掲載が増えていることから、生活科を中核としたスタートカリキュラムが、「適応指導」になってしまう可能性がある。また、文部科学省が 2015 年１月に発行した「スタートカリキュラムスタートブック」で「幼児期からの学びと育ちを生かす活動や環境を意図的に設定することで、子どもは自信や意欲をもって活動し、自己発揮できるようになります。」[37]と述べられているにも関わらず、スタートカリキュラムには、幼児期の学びを繋ぐという面が弱いと言える。

以上より、今度の課題として、適応指導ではないスタートカリキュラムを考えたい。学校に適応するための指導が不必要なわけではない。学校に適応するための指導を取り出して行ってしまっていることに問題がある。そのため、生活科を中核にして行うにあたり、現状として、取り出して行われてしまうことの多い「学校に適応するための指導」を、どのように活動を通して行うのかを念頭に置き、更に幼児期の学びとは何であるかを考察し、幼児期と小学校期を繋ぐためのカリキュラムを考えたい。

【引用・参考文献】

１)文部科学省「小学校学習指導要領解説生活編」, 2008 年, 日本文教出版, p. 4
２)上掲書１), p. 5
３)東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課「小１問題の予防・解決のために」, 2011 年, 東京都教育委員会
４)和田信行『小学１年生「わくわくドキドキ」カリキ

ュラム―幼小連携・生活科を核にして―』，2008年，学陽書房，p．2
5)後藤正人「第３章　生活科と幼児教育との連携」，『生活科で魅力ある学級づくり～幼稚園・保育園から総合へつなげる生活科～』，2014年，文溪堂，p.19
6）横浜市こども青少年局，横浜市教育委員会「第１章　育ちと学びをつなぐ接続期のカリキュラム」，『育ちと学びをつなぐ～横浜版接続期カリキュラム～』，2012年，横浜市こども青少年局・子育て支援課幼保小連携担当，p．2
7)上掲書６)，ｐ．８
8)前掲書６)，ｐ．９
9)前掲書６)，ｐ．９
10)前掲書６)，ｐ．８
11）一前春子・秋田喜代美「地方自治体の接続期カリキュラムにおける接続期とカリキュラムの比較」，『国際乳幼児教育研究 Vol.20』，2012年，国際幼児教育学会，p.88
12)和田信行『スタートカリキュラムがよくわかる！小１プロブレムを起こさない教育技術』，2013年，小学館，pp.32-33
13)文部科学省「幼稚園教育要領解説」，2008年，フレーベル館，p.220
14)厚生労働省「保育所保育指針解説書」，2008年，フレーベル館，p.121
15)内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」，2014年，チャイルド本社，p.25
16)前掲書13)，p.230
17)前掲書14)，p.142
18)前掲書15)，p.27
19)無藤隆『はじめての幼保連携型認定こども園教育・保育要領ガイドブック』，2014年，フレーベル館，p.105
20)前掲書６)，pp.58－61
21)佐伯胖「幼児の学ぶ力を育む」，『児童教育13』，2003年，お茶の水女子大学附属小学校児童教育研究会，p．2
22)前掲書６)，pp.68－70
23)前掲書６)，pp．８－９
24）文部科学省「スタートカリキュラムの編成の仕方・進め方が分かる　スタートカリキュラムスタートブック」，文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター，2015年１月，p．2
25)前掲書１)，p.45
26)和田信行「スタートカリキュラム作成上の留意点」，文部科学省「初等教育資料　2014年12月号No.920」，東洋館出版，2014年，p．８
27)上掲書26)，p．９
28)三塚幸恵「事例２　生活科を中心とした単元構成 仙台市立広瀬小学校」，木村吉彦(監修)・仙台市教育委員会(編集)『「スタートカリキュラム」のすべて―仙台市発信・幼小連携の新しい視点―』，2010年，ぎょうせい，pp.69-80
29)上掲書28)，p.78
30)前掲書28)，p.79
31)前掲書28)，p.80
32)川崎市下作延小学校「生活科・総合的な学習の時間中間報告会 研究紀要」，2015年，p.15
33)無藤隆「幼児教育から小学校低学年の教育へ」，日本生活科・総合的学習教育学会「せいかつか&そうごう第14号」，2007年，ｐ.42
34)上掲書33)，ｐ.43
35)前掲書１)，ｐ．９
36)前掲書５)，ｐ.22
37)前掲書24)，ｐ．３